

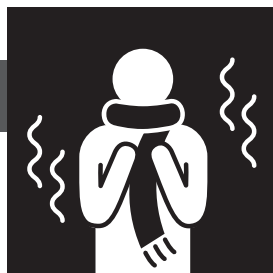
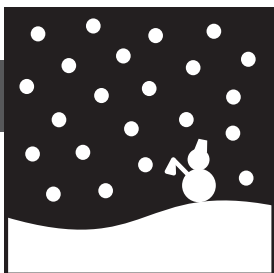
アクセシブルデザインの総合情報誌 インクル

2012 (平成24) 年1月25日 **NO. 76**

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)
共生社会の実現を願う妖精「インクル」。「包括的教育理念」を意味する英語「インクルージョン」から名付けました。

目次 / contents

■ 2012年 年頭ご挨拶 (鴨志田厚子).....	2
■ <随想 私と共用品> 第54回 真のボランティアから生まれた共用品思想 (大熊由紀子).....	3
■ <<特集>>先駆的な共用サービスの分野の紹介 「字幕つき」テレビCMの定常化をめざして (林佳文).....	4
■ 『演劇結社ばかりばかり』と、 公演『キョウヨウコウザ』について (美月めぐみ).....	6
■ 映画のバリアフリー化を目指して (菅谷百合子).....	8
■ 視覚に障害のある方の取扱い説明書 (上野目玲子).....	9
■ KOKUYO DESIGN AWARDと ユニバーサルデザインのとりくみについて (下野由美子).....	10
■ 点字サインの国際標準化への取り組みはじまる 国際会議に参加して (青松利明).....	12
■ 海外事例紹介 スウェーデンのアクセシビリティ・データベース (松岡光一).....	13
■ <キーワードで考える共用品講座> 第70講 共用品という思想 (その5:次世代に伝えること) (後藤芳一).....	14
■ <事務局長だより> 日本人の選択方法と共用品 (星川安之) 共用品通信.....	15
■ <わが社のエース> 株式会社図書館流通センター 指定管理業務で新宿区立戸山図書館を管理運営 (金丸淳子) 奥付.....	16



■ 「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則 (JIS T 0103)」に収録されている絵記号例。左から「雪」「寒い」「風呂」(共用品推進機構ホームページから無償ダウンロードできます)

<2012年 年頭ご挨拶>

財団法人共用品推進機構

理事長

かもし だあつこ
鴨志田厚子



2012年 あけましておめでとうございます。
す。

本年も皆様のご発展を祈念し、また共用品
思想普及へご支援くださいますよう、よろし
くお願いいたします。

昨年は東日本大震災による想いも寄らぬ大
災害が起り、油断しがちな私達の生活に大
ショックをもたらしました。被災された多く
の方々には、心よりお見舞いを申し上げます。

日本再生元年といわれている中で、本年、
当機構は、「公益財団法人共用品推進機構」
となり、「公益」という新たな冠が付される
ことになりました。

市民団体E&Cプロジェクト時代8年、財
団法人共用品推進機構設立より12年を経て、
公益財団法人として社会的に成長できました
ことはひとえに、賛助会員の皆様並びに関係
いただいた方々のお陰と感謝いたしております。
振りかえれば当初より共用というキー
ワードの下で、公益に通ずる活動を続けてき
たところですが、改めて「公益財団法人」と
しての役割と責任を考え、更に幅広く、深化
した活動を心掛けようと思う次第です。

先の東日本大震災について、世界各国の報
道が紹介され、その中で特に被災者である日
本人の冷静沈着、相互援助の精神で混乱もな
く、整然としている姿が高く評価されていた
ことに、同じ日本人として大変、誇らしく感

じました。この互助の
心を大切に育てて行き
たいと思い、これから
も日本文化の基本とし
て定着することを切に願いたく思います。

互助～共助の精神は、まさに共用品推進機
構の基本精神にあたります。

共用品・共用サービスという表現を主軸に
今日まで活動を続けてきたところですが、昨
今、国際標準化機構（ISO）関係の表現では、
アクセシブルデザインが浮上しています。日
本では、ユニバーサルデザイン、バリアフ
リーデザインなど、ほぼ同義語が併行して使
われている状況が少々混乱を招くであろうと
心配です。

一方、日本発の共用という言葉も、その心
を今一度、確認し社会の一般用語の中に浸透
していくことを期待したいと思います。

世界が注視している東日本の復興計画、
様々な困難があると思いますが、日本の智
慧と技術と優しい心を駆使して世界的な手本
になる、新しい地域づくりを成功させて欲し
いと願うところです。

日本には、「わざわい転じて福となす」と
いう諺があります。前向きで力強い言葉では
ないでしょうか。

ここに「頑張ろう東北！」を添えさせてい
ただきます。

真のボランティアから生まれた共用品思想

おおくま ゆきこ (福祉と医療・現場と政策をつなぐえにしネット・志の縁結び係/
大熊由紀子 国際医療福祉大学大学院教授/共用品推進機構理事)

「共用品思想の定着を」と朝日新聞の社説に書いたのは、1999年の敬老の日のことでした。この年の春、E&Cプロジェクトが財団法人共用品推進機構として再出発したことを広く知ってもらおうという魂胆あつてのことでした。

北欧では1970年代に「万人のための社会」という名の政策が打ち出されていました。スウェーデンの障害者団体中央連合会HCKの会長で、後に厚生大臣になった盲目のベンクト・リンクビストさんたちの提案が実つてのことでした。

そして、1991年、E&Cプロジェクトによって、日本生まれの「共用品・共用サービス」という考え方が提唱されました。盲の方たちの思いを汲み取つたものでした。

「高齢者や障害者の誇りを大切にし、あらゆる人が製品や建物を使えるように、計画やデザインの段階から配慮する」

「高齢者や障害者が使いやすければ、一般の人にも使いやすい」

そのような発想に基づく共用品・共用サービスの定義を社説ではこう書きました。

- ・からだが不自由な人もそうでない人も、ともに使いやすい
- ・「専用」ではない
- ・どこでも、いつでも手に入れたり、利用したりできる
- ・一般的な製品やサービスと比べて、特に高くない
- ・継続的に製造、販売、提供されている

E&Cプロジェクトは、官僚も企業の人も個人として加わり、触発しあう中から、次々と製品やサービスが生まれていきました。

ソニーは、指先の力が弱くても操作しやす

く、耳が聞こえにくい人にも便利なラジカセを開発していました。松下電器は役員自ら高齢者の疑似体験をし、商品開発の重点に「加齢化配慮」を加えました。TOTOが高齢者や障害者のために改良したトイレは、一般住宅用として急速に普及しつつありました。



社説は冒頭で、「人は自信とともに若く、不安や恐怖とともに老いる」という米国の詩の一節を引用して、E&Cプロジェクトの調査報告をこんな風に紹介しました。

長命国になった私たちの社会。日々の暮らしの中で自信を失っている高齢者がかなりの数にのぼる。「食品を包んでいる袋やビン、カンを開ける力がなく、食べられない」、「電気製品の機能が多すぎ、途方にくれる」、「説明書を読んでも使い方がわからない」

駅の階段を下りるときの恐怖も深刻だ。昇り以上に降りが辛い。

それから、20年。私自身が、「日々自信を失う」日々です。それにしても、E&Cや機構に集う方々は、『恋するようにボランティアを～優しき挑戦者たち』（ぶどう社）のために作った「おゆきの法則」にぴったり。

「真のボランティアは、自分がボランティアと気づいていない」

「ボランティアは伝染する」

「ボランティアがつながると社会が変わる」

なかの なつみ (題字は、中野奈津美・財共用品推進機構運営委員)

「特集」先駆的な共用サービスの分野の紹介

共用品推進機構が、対象としている分野は大きく二つ。製品とサービスである。現在、改定作業が国際標準化機構（ISO）で行われているガイドの中でもその二つはしっかり謳われている。しかし、今までは、製品分野での工夫が先行し、共用サービスに関しての取り組みがやや遅れていた感がある。共用品と共用サービスは補完関係にもなるため、共用サービスに関してこれからは特に力を入れていく必要がある。

今回、そのような背景のもと四つの異なる分野の方々に、テレビの「CM」、「演劇」、「映画」、そして「取扱い説明書」に関する、先駆的な共用サービスの取り組みについて御紹介いただく。

「字幕つき」テレビCMの定常化をめざして

花王株式会社 作成センター 字幕CM研究プロジェクトチーム 林 佳文 はやし よしふみ

■プロジェクトの発足

テレビ放送の地上デジタル化への完全移行に伴って、番組自体の字幕放送化はほぼ普及してきました。ところが、民間放送の約2割を占めているCM（コマーシャル）には字幕がついていません。CMは製品を広告・宣伝する強力なメディアでありながら、日本に約2,000万人*¹いらっしゃると言われる聴覚が不自由な方々には情報がきちんと伝わっていない。このことは、ユニバーサルデザイン視点で事業活動を行っていくうえで見逃せない課題でもありました。

昨年2月、弊社作成センター内に、字幕CM研究プロジェクトが発足。聴覚に障がいのある方や耳が聞こえにくくなった方をはじめ、日本語を勉強されている外国人の方にもテレビCMで製品情報をわかりやすくお伝えできるよう、字幕による最適な情報伝達方法の開発と放送実施、さらには字幕つきCM標準化の実現をめざした活動がスタートしたのです。

*1：日本補聴器工業会試算の推定値

■テスト版の制作と検証

私どもプロジェクトメンバーが、まず取り組んだのは、テレビ字幕そのものを知ること。

字幕放送システムであるクローズド・キャプション*²には、技術的な制約によって字幕の制作面では厳しいルールのあることがわかりました。

そこで、弊社の既存CMにテスト版として字幕をつけてみることにしました。ナレーションやテロップの多いCM、多数の出演者が登場するCM、キャラクターや歌のあるCMなど、字幕をつけるのが困難だと思われるCMをあえて選び、字幕つきCMのテスト版を制作したのです。

できあがったCMは、社内のイントラネットに公開してアンケートを行い、内容のわかりやすさや文字の見やすさなどを検証。同様に、聴覚の不自由な主婦や学生の方々にもご協力いただき、ヒヤリングを実施しました。プロジェクトメンバーが想像できなかった内容も含め、実にさまざまなお意見をいただき、そのなかから最もご要望の多かった次の二つについて、トライアル放送での暫定的な基本ルールと決めたのです。

- ①音声情報にはすべて字幕をつける（テロップで表示されている内容でも省かない）
- ②字幕を表示する位置を画面下に揃える

*2：リモコンの「字幕」ボタンを押さないと表示されないことから、こう呼ばれています。

■トライアル放送の実施

このプロジェクトの主旨にご賛同をいただいた放送局、広告代理店のご協力によって、いよいよ第1次トライアル放送が決定。弊社が単独提供している番組のドラマチックサンデー「花ざかりの君たちへ～イケメン☆パラダイス2011」（フジテレビ系列／日曜日21：00放送）で、昨年8月21日から9月18日までの計5回に投入するCMは、すべて字幕つきで放送。合計30本の字幕つきCMによって、字幕放送をご覧になっている方へ情報発信しました。プロジェクト発足から約半年、目標達成へ向けて、とりあえずの第一歩となったのです。



■読みやすいように画面の下に揃えた字幕

■放送後の反響

実際にテレビで放送した字幕つきCMについての評価をしっかりと把握し、今後の制作に活かしていくため、共用品推進機構のご助力のもと、全日本ろうあ連盟、全日本難聴者・中途失聴者団体連合会、およびそれぞれの加盟団体の方々にアンケートのご協力を依頼。放送をご覧になった197名の方々からご回答いただきました。

「内容はわかりやすかったですか？」の問いに、「はい」とお答えいただいたのは90%。今回の基本ルールとした「字幕の位置は画面の下に揃えた方がいいですか？」には78%で、多数の方からご支持をいただきました。

「すべての音声情報に字幕があった方がいいですか？」では62%。この件については今後も検討を重ねていくことにします。

また、多くのご意見・ご要望もいただきました。「CMを“目”で聞いて、コピーに感動した!」「CMの話題で家族と会話できたのが嬉しかった!」「商品のことを理解できると親しみが持て、なんか買いたくなった」そのほとんどが、字幕つきCM放送への感謝、温かい激励のお言葉、そして今後も継続しての放送を求められる内容でした。

■今後の展開

弊社より先行して、すでに数社の企業でも字幕つきCMのトライアル放送を実施していましたが、残念ながら継続的な放送には至っていません。毎日の暮らしに身近な製品を扱うメーカーとして、テレビで多くのCMを放送している企業として、弊社では字幕つきCMの本格的な運用開始の一日でも早い実現を強く望んでいます。

その思いを少しでも前へ進めていくため、2012年1月からは、弊社のもうひとつの単独提供番組である「A-Studio」（TBSテレビ系列金曜日23：00放送）で、第2次トライアル放送を行っています。

テレビだけではなく、弊社Webサイトに掲載しているCMにも、すべて字幕をつけて配信。パソコンやスマートフォンなどで、いつでも何度でも自由に字幕つきCMをご覧いただけるようになりました。

ユニバーサルデザイン視点で、どなたにもわかりやすく情報をお届けできるコミュニケーションの普及へ。これからも、このプロジェクトの活動は、続いていきます。



■見る人が字幕の位置を変えられるWeb版

『演劇結社ばかりばかり』劇団紹介と、公演『キョウヨウコウザ』について

演劇結社ばかりばかり ^{みづき} 美月めぐみ

■「演劇結社ばかりばかり」

皆さん、はじめまして。

私は、『演劇結社ばかりばかり』（以下、「ばかりばかり」と略します）という小劇場系の小さな劇団で舞台役者をやっている全盲女子・美月めぐみと申します。

ばかりばかりは、『バリアフリー映画鑑賞推進団体 City Lights』の字幕朗読ボランティアとして知り合った鈴木大輔（ばかりばかり主宰）と私・美月めぐみを中心に、2007年に立ち上げた、オリジナルの福祉系コメディを上演する劇団です。

“観る側も、演じる側も、バリアフリー”をコンセプトに、“誰でも楽しめる芝居”を目指して活動しています。語呂が良いのでこんなスローガンを掲げてはいますが、どちらかというところユニバーサルデザインやアクセシブルデザインといったほうが正確だと思います。

具体的には以下のようなことを実践しています。

1. 肢体不自由の方向けの配慮

公演を行なう劇場は、車いす利用者でも入りやすい、1階にあるか、エレベータで移動できる劇場を選んでいきます。

2. 視覚障害者の方向けの工夫

視覚障害者の方は日常に近い距離感でなら役者の動きが音で判るので、なるべく前の席に座っていただきます。もちろん、見え方・聞こえ方には個人差があるので、ご本人のご希望を優先します。

芝居の外側に音声ガイドをつけるのではなく、脚本や演出で工夫して内容が判るようにしています。全盲の私・美月が全盲の登場人物として舞台上にいるので、周りの登場人物が私に説明すると、それイコール視覚障害のお客さんへの説明になるというわけです。

その他、駅からの誘導、点字パンフ、CDパンフの配布、すべての公演チラシに点字を入れる、開演前に舞台装置の説明を行なう等の工夫をしています。

3. 聴覚障害の方向けの工夫

一昨年の公演では、登場人物がセリフを手話やスケッチブックを使って表わしました。

昨年11月に上演した新作『キョウヨウコウザ』では、登場人物が字幕打ちのリハーサルをしているという設定にして、舞台中央奥のスクリーンにリアルタイムで同時字幕通訳を行いました。

4. その他

希望者への台本貸し出し

また、「演じる側」としてのバリアは、全盲の私が健常者に混じって健常者の役をやるのでは、お金を払って観にいらしたお客さんに不安や違和感を与えてしまうのではないかということだったのですが、これは発想の転換で、全盲が全盲の登場人物として舞台上でも息づくことができれば、解決できるバリアだと気づきました。私は、元々朗読劇の勉強をしたり、演じたりする活動を地味に続けてきたという経緯もあり、私が存在することを生かせる舞台を作れるならと、この「ばかりばかり」の活動を続けています。

■『キョウヨウコウザ』ができるまで

さて、今回の作品『キョウヨウコウザ』（2011年11月10日～13日8回公演）を大雑把に一言で言ってしまうと、バリアフリーやユニバーサルデザイン、アクセシブルデザインという考え方や具体例をひっくるめて「共用品」という思想を知ってもらうような内容の芝居でした。

最初は、主宰・鈴木との雑談の中で、「昔、私が関わっていたE&Cプロジェクトという市民活動の中心人物の一人、星川安之さんはなかなか面白い人でねえ」と語りだした私の話しに、鈴木がすっぴんのめり込んでくれたところから始まりました。その夜のうちに、「星川さん物語をやろう！」という話がまとまり、さっそくご本人にメールしたところ、「まもなく、良い参考資料になりそうな本が出るから、それからにしたら？」とのこと。その本というのが、岩波書店から出版された『共用品という思想—デザインの標準化をめざして—』でした。

後藤芳一さんと星川さんとの共著に成るこの本を読んでもみると、これはもう芝居で表現してみたいことの宝庫でした。



■左より 舞台説明 シャンプーのギザギザ 字幕打ちと肘鉄

そして、「星川さん物語」は見事に方向転換し、“共用品を広めようとする若者たちの物語”としてまとまってきました。もちろん、その脚本をまとめる過程では、星川さんからいろいろな体験談などを直接伺ったりもしたのです。

■『キョウヨウコウザ』ストーリー

ある市民活動のボランティアグループにオブザーバーと呼ばれた全盲役者の美月と、共用品に関する活動の先駆者・星野が、そのグループが稽古している寸劇のモニターにやってくると、なぜか大きな勘違いをしてその稽古場に現れた頭ガチガチの演劇青年と、全てを字幕化する研究者が待っていました。

そこへ、仕事帰りに続々と集まってくるグループのメンバーたち。彼等が繰り広げる寸劇は「シャンプーのギザギザ」「洗濯機物語」「規格化」などというタイトルの素人芝居の数々、勘違い青年は、怒りと失望のあまり、その部屋を退出しようとするのだけれど…。

ある青年の、たった90分間だけの成長物語を観ているうちに、共用品についてまったく知らなかったお客さんも、「へえ!」「ほお!」と、何かを感じて帰って行かれるという、そんなお芝居でした。

■『キョウヨウコウザ』初の試み

今回初めての試みとして、舞台の真ん中に置いたスクリーンを使って、左右に漫画のフキダシのような台詞字幕を表示させ、そのフキダシの枠の色と同じ色で統一した衣装を着た出演者たちが、フキダシの傍まで来て台詞を言うという、実に画期的（なのだろうか？）な聴覚障害の方向けの工夫を実現してしまいました。例えば、私がしゃべるときのフキダシはピンクで、私の衣装は、頭に付けたシュシュ（髪留め）からセーター、スカー

ト、靴に至るまで全てピンク。星野は全て茶色といった具合です。

残念ながら、聴覚障害の方への宣伝が行き届かず、ほんの数名にしか観ていただけなかったのですが、これらの工夫はなかなか好評だったようで、担当者もほっとしていました。実はこれ、字幕打ちの桃内役の女優・こんやゆうこが、実際に大学で研究をしている方法の実践も兼ねていたのです。

■『キョウヨウコウザ』の反響

また、内容に関してもやはり概ね好評で、特に、時代劇仕立ての「洗濯機物語」のシーンは、爆笑をいただきました。

おかげさまで、再演の呼び声も高いようですので、これ以上の内容については触れずにおきたいと思います。再演の再は、皆様ぜひ足をお運びください。

この作品の再演のみならず、どうぞ私たち『演劇結社ばっかりばっかり』の舞台をご覧にいらしてください。お待ちしております！

劇団としての目下の悩みは、人材不足と資金不足です。

こんな活動にご共感いただけましたら、ぜひこちらの演劇ワークショップにいらしてください。

また、ご協賛いただける団体・企業の方も絶賛募集中です。

近々の予定としては、2月11日に、名古屋での朗読会を予定しています。

諸々ご興味を感じていただけた方は、劇団HPをご覧ください。

<http://www.bakkaribakkari.net/>

長文お付き合いただきまして、本当にありがとうございました！

映画のバリアフリー化を目指して

～ひとりでも多くの人に映画を楽しんでいただきたい。その思いを形にしました～

住友商事株式会社 環境・CSR部 ^{すがや ゆりこ} 菅谷百合子

住友商事は、社会貢献活動の一つとして、視覚や聴覚に障がいがある方々の「話題の映画を、話題の時に、家族や友人と一緒に映画館で観たい」との要請を受けて、2004年から映画のバリアフリー化に取り組んでいます。映画のバリアフリー化とは、映画に聴覚障がい者のための日本語字幕と視覚障がい者のための音声ガイドを付けて、公開と同時に全国の映画館で鑑賞できる機会を提供する取り組みです。毎年3本程度の作品を継続的にバリアフリー化し、2004年から現在までに合計20作品を提供してきました。

日本では、交通インフラなどのバリアフリー化は順調に進んでいますが、残念ながら、文化・芸術面でのバリアフリー化が遅れています。映画については、聴覚障がい者用の日本語字幕は普及しつつありますが、視覚障がい者が音声ガイドを利用し、映画の場面を想像しながら鑑賞できることはあまり知られていません。こうした現状のなかで、音声ガイド付映画を鑑賞するために映画館に足を運んでいただいた視覚障がいのお客様からは、「失明してから初めて映画を観ました。みんなと一緒に映画を観るのは楽しいですね」「晴眼者の友達と話題の映画の話ができるようになってうれしい」などの感想が数多く寄せられています。

当社は、日本語字幕や音声ガイドを障がい者のためだけのものとはとらえていません。障がいのない人達でも、字幕があることで聞き取りにくかったセリフを確認できる、音声ガイドがあることで見落としていた映像情報に気づくということがあるため、字幕や音声ガイドは高齢者をはじめ誰にとっても便利なツールであり、ユニバーサルデザインと位置付けていくべきものではないかと考えています。当社は、小中学校の総合学習の時間に字幕や音声ガイドの制作を体験してもらう出前授業を行ったり、全国各地の点字図書館等が開催する体験上映会を支援するなどバリアフリー映画の普及活動も推進していますが、このような活動を通じて、誰もが一緒に楽しめるというバリアフリー映画の特長を理解いただくよう努めています。

住友商事は、今後も映画のバリアフリー化に継続的に取り組み、できるだけ多くの方々にバリアフリー映画の存在を知っていただくことで、障がいのあるなしにかかわらず共に映画を楽しみ、語り合う空間を共有できる豊かな社会の実現を目指していきたくと考えています。



音声ガイド：
セリフとセリフの間の場面解説をナレーションすることで、視覚障がい者が映像を想像しながら映画を楽しむ

日本語字幕：
セリフや話者、効果音を表示することで、聴覚障がい者の理解をサポート



©2010「武士の家計簿」製作委員会

■誰が話しているかわかりづらいシーンは話者を提示している

視覚に障害のある方の取扱い説明書

社会福祉法人 日本点字図書館 図書製作部

かみの めいこ
上野目 玲子

私は（社福）日本点字図書館 図書製作部に席を置き、録音図書の製作に関わってきました。録音図書は、朗読ボランティアの皆さんが、活字図書に書かれた文字情報や図表等を、視覚に障害のある人びと（以下、視覚障害者）が耳で聞いてわかりやすいように工夫や配慮を重ねながら音声化して製作します。

当館は、録音図書・点字図書製作で長年培ってきたノウハウを生かして、自治体・団体等の広報誌、商品カタログ、商品情報等の音声コンテンツ製作や点字化もおこなっています。これらも、視覚障害者の生活に役立つ情報の音声化・点字化という点において重要な仕事と考えています。

郵送による貸出業務が中心の当館ですが、視覚障害者に便利で使いやすい商品を販売している「わくわく用具ショップ」は、オープンカウンター方式で、商品を手にとって実際にご覧いただくことができるとあって好評です。

取扱い商品のうち、ターゲットを視覚障害者に絞って企画・製作された機器や日常生活用品には、①操作がシンプルで使いやすい、②操作を音で確認できる、③設定状況や注意喚起などを分かりやすく音で知らせる等の配慮がなされています。

このような機器には、販売当初から墨字版、音声版（音楽CD版、デージー版、テープ版）、点字版のいずれかまたは複数の媒体による取扱い説明書が用意されています。

一方、視覚障害者向けに企画された製品ではないものの、機能が多すぎない、操作も複雑ではない等の理由から取扱いを決める商品があります。音声版取扱い説明書については、製品に附属している取扱い説明書を音声化して、商品に添付するのですが、オリジナルの

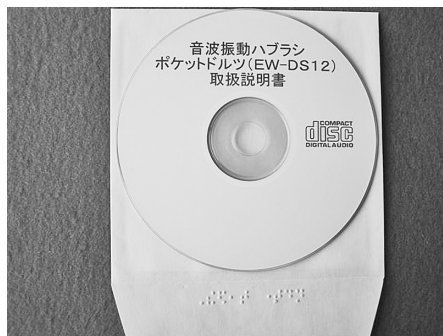
取扱い説明書をそのまま読んで“完成”というわけにはいかないことがほとんどです。

目が見える人は、機器を前にして取扱い説明書の中から必要なところをその都度検索して読むことができますが、視覚障害者は、まず音声版の取扱い説明書を再生し、目次部分を聞いて、自分が必要な情報の掲載箇所を確認し、その場所にジャンプしなければ知りたい情報にアクセスすることができないのです。

「目次」の前に「安全上のご注意」、「守っていただきたいこと」が書かれているかも知れませんが、安全に関わる大切な情報を省略することはできないと思いますが、音声版では読み込む位置を工夫したり言葉を補ったりすることによって、使いやすい取扱い説明書になるでしょう。

音声版取扱い説明書を作成する時、ナレーターは実機を説明書の通りに操作しながら、読み原稿の調整を進めています。曖昧な表現は誤った使用につながり、場合によっては危険を伴うおそれがあるからです。また、実機があれば操作ボタンの大きさや形状の違いのようなヒントが見つかって、理解の助けになるかも知れません。

視覚障害者の利用が見込まれる機器や日常生活用品の取扱い説明書は、“視覚障害者が、必要なときに一人で安全に使いこなせる”ものであってほしいと切に願います。



■音声取扱い説明書デージー版

KOKUYO DESIGN AWARDとユニバーサルデザインのとりくみについて

コクヨ株式会社 広報コミュニケーション部 しものゆみこ 下野由美子

使う人ならではの優れた商品アイデアを広く募集し、商品化をめざすデザインコンペティションとして、コクヨは2002年よりKOKUYO DESIGN AWARD（以下、コクヨデザインアワード）を開催しています。（但し、2010年のみ休止）日頃から慣れ親しんでいる文房具・家具のアイデアを募集対象とし、子供からお年寄りまで幅広い層から参加をいただいています。

2004年からは国際コンペティションとしても展開し、近年は国内外併せて約1600点の応募をいただいています。

これまでの商品化事例としては、ニューヨーク近代美術館（MOMA）のパーマネントコレクションに認定されている「カドケシ」（消しゴム）や、グッドデザイン賞金賞受賞の「キャンパスノート<パラクルノ>」（ノート）、中高生を中心に人気を博している「ビートルティップ」（蛍光ペン）などがありますが、特に「カドケシ」や「パラクルノ」は第一回目の受賞作品であり、ユニバーサルデザインがテーマの作品です。

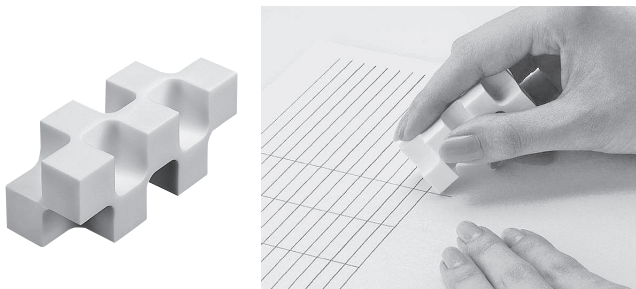
ユニバーサルデザインは「最大限、誰でもが使いやすい設計・製品仕様」を理想として、1990年にアメリカの故ロン・メイス博士が提唱したコンセプトですが、その当時、日本のモノ作りは、メーカーの一方通行による商品提供によりユーザーニーズに合致しない製品が数多く開発されていた時代です。コクヨも

残念ながら例に漏れていませんでしたが、1998年、ユニバーサルデザインがこれからのモノ作りの重要なデザイン指標の1つになると考え、社内の商品開発に取り入れ始めました。

また、ユニバーサルデザインにはロン・メイス博士が提唱したプロダクト・パフォーマンス・プログラムがありますが、コクヨは、この評価指標を噛み砕き、誰でも活用できるガイドラインとして「コクヨのユニバーサルデザイン製品開発5+1要件」を設定しました。コクヨ製品とユニバーサルデザインが両立するよう、ターゲットユーザーの幅を広げる一方でユーザーの利便性を損なわないように、また価格の上昇によってユーザー価値が低下しないように、そして安心して人に優しいデザインを追及できるよう配慮しました。

このコクヨ独自のガイドラインにより、コクヨのユニバーサルデザイン製品が誕生することになります。

- コクヨのユニバーサルデザイン製品の5+1要件
- <要件1>製品としての基本機能・基本性能が確保されている
- <要件2>使用時はもちろん、未使用時（使用前・使用后・保管時）の安全が確保されている
- <要件3>表示、色彩、形状等に配慮する
- <要件4>軽便、単純、普遍的な操作性・インターフェースを追及する
- <要件5>操作の正否や残量等の情報を判断できる、仕組みを追及できる
- <+1要件>従来と比べても遜色ない価格設定



■カドケシ
28箇所の角を持つ消しゴム。
細かい部分もラクラク消すことが可能。



■キャンパスノート<パラクルノ>
めくる時を考慮して、断面の上半分と下半分が斜めにカット。

コクヨのユニバーサルデザイン製品が少しずつ増えるにつれ、開発サイドも自然と顧客の声を聞き、製品へ反映していく姿勢に変わりつつありました。そんな中、エンドユーザーは私達が思っている以上に製品に対して不満や要望があり、場合によってはそれを改善するアイデアを持っていることに気付きはじめます。多様なエンドユーザーの声を聞き、それを活かしたもの作りを行う。そこに一歩踏み込み、エンドユーザーのアイデアをそのまま製品に活かさないだろうか？ここからコクヨデザインアワードの企画がスタートしました。

当初は、ユニバーサルデザインをもっと世の中に普及させたいという目的でユニバーサルデザインコンペティションとして計画していましたが、時代と共に発信すべき企業メッセージも変わるであろうという予測と、また最低10年継続することでこの活動を定着させたいという思いから、メインタイトルからユニバーサルデザインを外し、「コクヨデザインアワード」としてスタートしました。そして2002年、第一回目の記念すべきテーマに「ユニバーサルデザイン」を設定しこの活動を幅広く発信しました。

コクヨデザインアワードはその時代に合わせて毎年テーマを設定していますが、審査基準には常にコクヨのユニバーサルデザインの考えを取り入れています。



■ビートルティップ
カブトムシの角のようにペン先が二股に分かれた蛍光ペン。太字、細字、二重線の3種類の線を引くことができる。

コクヨがユニバーサルデザインに取り組みだして10年目にあたる2008年にガイドラインを見直し、一部の製品に限られていた活動も2009年7月以降、全てのコクヨ製品（材質、サイズ変更などの一部新製品は除く）を対象とし、改訂版ガイドラインに従って進めることを義務づけました。

コクヨデザインアワードにおいても現在はこの新たな評価指標をもとに審査を行っております。

- 改訂版 コクヨのユニバーサルデザイン
「1つの原則」と「5つの視点」
- <原則1>できるだけ多くの人にとって使いやすい
 - <視点1>基本がしっかり
(商品としての基本性能がしっかり保たれていること)
 - <視点2>五感でつたわる
(文字・図形・音・カタチ・色などを通じて情報がわかりやすいこと)
 - <視点3>安全・安心
(使う時も使わない時も安全性が高いこと)
 - <視点4>使い方がわかる
(操作方法がすぐにわかること)
 - <視点5>ラクに使える
(負担を感じることなくこちよく使えること)

コクヨデザインアワードも今年で10回目を迎えます。

これからもユニバーサルデザインの考え方を前提に多くのお客様に愛される商品作り、お客様起点のものづくり活動を推進してまいります。

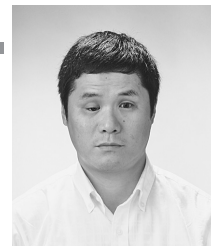


■コクヨデザインアワード2011の表彰式にて受賞者と審査員との記念撮影。

点字サインの国際標準化への取り組みはじまる 国際会議に参加して

筑波大学附属視覚特別支援学校 教諭

あおまつとしあき
青松利明



点字を常用する視覚障害者にとって、読書に加えて日常生活のさまざまな情報が点字で提供されることは大きな夢であり、生活の利便性を高めることにつながる。例えば、コンビニで買い物をする時に、手に触れた商品に点字が書かれていれば、店員さんに手助けを依頼しなくても商品を自分で選択することができる。また、駅で改札からプラットホームへ移動する時に、列車の行き先方面が階段の手すり等に点字で書かれていれば、周囲の人に確認したり、一度ホームまで行ってアナウンスを聞くといった手間がなくなる。さらに、洗濯機・給湯機器・エアコン等の操作ボタンの機能が点字で書かれていれば、記憶だけに頼って不安な気持ちで操作することもなくなる。視覚障害者のこのような願いは、当事者側の長年に渡る働きかけと公共部門・企業の意識改革や努力の結果、不十分ではあるものの徐々に実現してきている。

しかし、点字による情報が書かれたとしても、設置者側の理解の不足から、大きさや高さ等点字のサイズが読みにくかったり、表示位置や情報の内容が不適切ということも以前にはよく見られた。そのようなことがあれば、せっかく点字で準備された情報が無駄になるだけでなく、視覚障害者に間違った案内をしてしまう危険性もある。それらの問題を解決するためには、公共施設や消費生活製品における点字表示に関する標準的なルールが必要となる。

そこで、日本工業規格 (JIS) として、2006年にJIS T 0921「高齢者・障害者配慮設計指針－点字の表示原則及び点字表示方法－

公共施設・設備」と、2009年にJIS T 0923 (高齢者・障害者配慮設計指針－点字の表示原則及び点字表示方法－消費生活製品の操作部) の二つの規格が作成された。その結果、標準的な点字のサイズ、点字の表示位置等をこれらの規格で確認し、公共施設や消費生活製品の操作部に表示することが可能となっている。

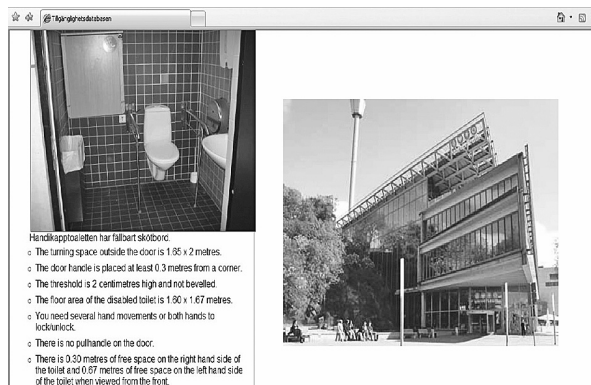
上記の規格を日本国内に留めておくのではなく、国際標準化機構 (ISO) に提案し国際的な規格とする試みが始まっている。ISOへの提案においては、二つの規格の共通部分である点字のサイズ等の原則のみを一つの規格とし、最初に提案することとなった。その提案が規格化された後には、公共施設や消費生活製品等への具体的な適用について、順次提案することが予定されている。

2011年6月にはISOで、日本の提案を審議することが認められ、3年間を目標に規格化を達成することとなっている。同11月にはその第1回ワーキング会議 (TC 173/SC 7/WG 1) がロンドンで二日間開催された。イギリス、ドイツからその分野の専門家が集まり、国際規格にするための詳細な検討がおこなわれた。私は視覚障害当事者として、また日本が派遣する専門家として、この会議に参加させていただいた。参加者全員がこの規格に大きな期待を持ち、誠実に忍耐強く議論をしたことが最も印象に残っている。視覚障害者にとって意味のある適切な国際規格を完成させるために、私自身も貢献していきたいと考えている。

海外事例紹介

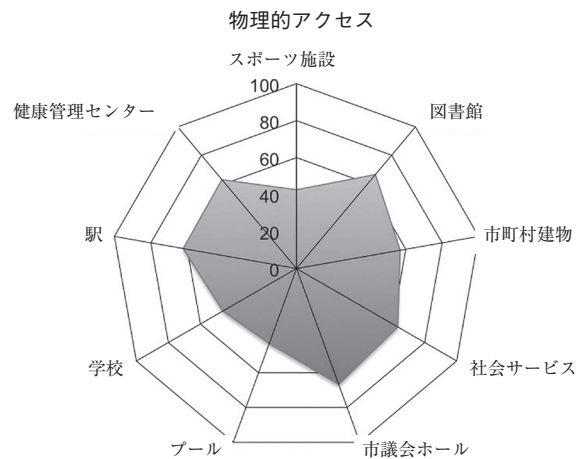
スウェーデンのアクセシビリティ・データベース

2011年10月5日スウェーデンのヴェストラ・イエータランド県人権局のMaranne Salenさんが当機構を来訪され、共用品の展示室を見学されました。その際に彼女が担当しているアクセシビリティのデータベースを説明してくれました。このデータベースは、交通機関や施設などのアクセシビリティの情報を利用者、施設管理者や関係者が確認するもので、12年前から作り始めて、7年前から運営しているそうです。700のチェック項目があり、既にこの地域の2万ヶ所の施設情報がこのデータベースに入っています。サンプルとして動物園の例を紹介してくれました。通路やトイレ、スロープや駐車場等たくさんの情報が写真付きで紹介されていました。障害のある人がその施設を訪問する前にこのデータベースをHPを見て、アクセシビリティの情報を把握することができ大変喜ばれているとのこと。下記のような建物の外観やトイレの写真がその一例です。



他にも施設ごとのアクセシビリティの改善

点リスト（法律面からみて）を提示する機能や市町村で施設グループ毎にアクセシビリティの程度を評価し、どこを強化すべきかを示唆するための機能もあります。下記はある都市の物理的なアクセスについて施設別に評価した例です。学校、図書館、駅、スポーツ施設等のグループに分かれて評価しています。



最後にこのデータベースの利点を説明するのに使用された絵をご紹介します。アクセシビリティに配慮している店がにぎわっている様子です。



尚このデータベースは下記のアドレスでご覧いただく事ができます。（英語版）

<http://www.vastsverige.com/en/Accessibility/>

まつおかこういち
(松岡光一)

「共用品という思想（その5：次世代に伝えること）」

後藤芳一^{ごとうよしかず}（財）共用品推進機構運営委員、大阪大学大学院工学研究科教授・日本福祉大学客員教授

不便さ^{④⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}への対応には多くの課題が残されており、**共用品**^{③⑥⑩⑬⑮⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}（小さい添え字^①～^②は、同様の用語が本講の第1～69講に既出であることを示す）への取組みは、世代を超えて続ける必要がある。世代を超えて伝えていくべきことを整理する。

1. 伝える方法

(1) マニュアル

再現性があるので確実な成果をだせるという利点がある。ただし、共用品の場合はまだ発展中であり、現場には個別の事情も強いので、マニュアルでとらえるには尚早である。

(2) 格言や箴言

簡潔に要点を表現するので効率がよいが、個々の格言には、誰がどの文脈でそれを話したのかという背景がある。それらをあわせて伝えていく必要があるので万能ではない。

(3) 取組みの過程とともに伝える

完成した姿をみせるだけでなく、設計図と、どのような背景でその設計をしたのか、どのような性格の人たちがどのような問題意識で取り組んだかをあわせて伝える。本講はこの方法によっている。例えば、共用品に寄与した人たちの性格として特徴的なのは、際立った能力というより、ふとしたことに「何故か」とひっかかるような性格といえる。

2. 伝えたいこと

(1) 共用品に取り組むこと自体

これから共用品に取り組む人たちには、草創期とは別の役割がある。草創期の人たちには、答えのみえないものを構想して創り出す力が必要であったのに対して、後継者には、過去の経緯を踏まえて引き継ぐ能力と、過去の成果に加えて創る能力という、背反しがちな二つの能力を備える必要がある。

これまでの共用品への取組みは、一人でレースをして一番になった状況に例えることができ

る。一方、今後は社会の意識が高まり、普及が進んでいることもあって、関係者が国内外に広がり、影響を与える範囲が広がっている。創始者としてさらに先の段階につなげていく役割が求められる。

日本の独自性を反映した概念の創出、取組みの普及、**標準化**^{②⑥⑦⑮⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿}などで国際的にリードしてきたことを、さらに発展させる役割である。こうした条件がそろう機会はそう多くはない。本格的な取組みを行おうとする人たちにとって、ふさわしい挑戦の場である。

(2) 共用品を超える部分

共用品に取り組むことを通じて、共用品だけで対応できる範囲に限界があることや、さらに別の次元の不便さが広がっていることに気がつく。共用品自身を深く見つめると同時に、共用品を通して広い世界がみえてくる。それを通して、共用品に取り組んでいることの意味を改めて見つめなおすことになる。

例えば、取組みの起点は、本当に最初から「不便さ」であったのか。むしろ、ふと感じた違和感のようなものではなかったか。提供した製品が使いこなされていない、という違和感、それに対応する方策は、共用品だけではなかったのかもしれない。

つまりは、共用品への取組みで最も肝心なのは、対象が共用品であったこと自身ではなく、その過程ということである。その意味で、共用品とは別の分野でも、共用品に取り組んだ過程が参考になる可能性がある。環境、貧困ほか社会にある課題に向きあうときに、共用品への取組みが参考になれば、持続する社会にするための規範を一つ加えたことになる。それによって、共用品が思想としての性格を持つことになる。

（本稿の表現は、後藤芳一・星川安之「**共用品という思想**」[岩波書店]から引用した）



星川
ほしかわ
やすゆき
安之

日本人の選択方法と共用品

選択方法の違いを知り、共用品の意義を改めて考える

シーナ・アイエンガー教授は、彼女の書いた「選択の科学」(原題は“The Art of choosing”)で、アジア系アメリカ人とアングロサクソン系アメリカ人の「選択」の仕方の違いを、調査を元に論じている。アングロサクソン系アメリカ人は、幼い頃から日常生活で選択する事項のほとんどを、自分で決めている。それに反し日本を含むアジア系アメリカ人は、幼い頃は母親の意見・意向を元に選択を行っているという調査結果である。

一見すると、幼い頃から自立心がある人種と、優柔不断で人の顔色ばかりをうかがっている人種に分けて分析終了となることを彼女は、更に考察を続ける。

例えばオリンピックなどでの個人競技で優勝したのがアングロサクソン系人種の場合、優勝インタビューでは「日頃からの自分の努力がこの優勝に結び付いた」と、優勝に至るまでのさまざまな選択を自分でやってきたことをその要因にあげる。そ

れに反しアジア系の人種が、優勝した時のインタビューは、家族を始め周りの多くの人達の協力、応援の力であることをその要因にあげる。

彼女は二つの事例を出し、アジア系人種は、多くの選択において自分の満足よりも自分以外の人の満足を優先し、そして他者の満足を自分の満身に置き換えることができる人種であると述べている。

彼女は1969年、インド人の両親の元にカナダで生れアメリカで育ち、3歳の時、網膜色素変性症と診断され高校にあがる頃、全盲となった。

着るものから結婚相手まで両親が決めるシーク教徒の中で育ちながら、学校では、選択こそアメリカの力という教育のはざまに育った彼女が選んだ研究テーマが「選択」というのも興味深い。

昨年3月11日おこった大震災で自分のことよりも他者を大切にする多くの日本人を報道した海外メディアは、「なぜあんなに落ち着いて他人のことがあの場合で考えられるの

か?」と、称賛と共にいくつもの「?」を付けた報道をしていたと聞いたが、彼女の論理からは「?」は、つかない。

共用品を作り広げる活動を始めた頃、アメリカでも時を同じくして「ユニバーサルデザイン」を、ロン・メイスさん達のグループが提唱し始めた。何度かメール等で情報交換をしたことがある。その時彼らが何度もいっていたのは、「アメリカでは考え方は理解されるのだが、日本の共用品のように実際に障害の有無にかかわらず使える製品はいっこうに開発されない」と、嘆いていたことが印象に残っている。

共用品推進機構は、実に多くの方々のお力で、この4月から公益財団法人へ移行する。共用品・共用サービスは、技術・論理だけでは発展しないことは、多くの事例で明らかに思う。どのように、技術・論理を、日本人が昔から持っている「おもてなしの心」にしっかりつなげられるか、大きな課題に挑みたい。

共用品通信

【会議】

- 第1回IEC (AAL) 国内委員会 (11月18日)
- 第2回展示会ガイド普及委員会 (12月8日)
- 第2回JIS改定委員会 (1月16日)

【講義・講演】

- 日本盲人連合会 青年部で講演 (星川、森川、11月19日)
- JICA研修 タイの研修生に共用品講義 (森川、12月19日)

【来訪・来所】

- 国立がん研究センターの看護師、ソーシャルワーカー等11名が展示室見学 (星川、11月18日)

【取材】

- 「2010年度視覚障害者不ばさ調査成果報告書」が毎日新聞12月13日15面で紹介
- RCC中国放送 (広島)「本名正憲のおはようラジオ」に電話出演 (森川、12月19日)

【表彰】

- KGSが平成23年度バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功勞者内閣総理大臣表彰を受賞

【その他】

- 東京書籍発行の中学校用道徳副読本「中学道徳2 明日をひらく」に「みんなで跳んだ」(滝田よしひろ著)が掲載

<読者の皆様へのおお願い>

「共用品通信 情報アラカルト」欄では新製品・新サービス、セミナー・講演・展示会、モニター募集など、個人・法人賛助会員の皆様からのお知らせも掲載致します。事務局「インクル編集担当宛て」に、ニュースリリース、イベント案内などの情報をお寄せください。Eメールも歓迎です。

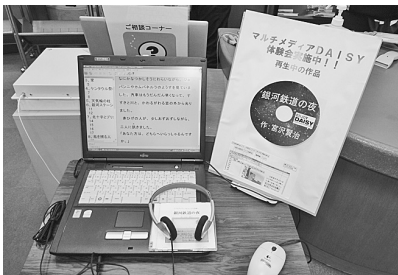


株式会社図書館流通センター

指定管理業務で新宿区立戸山図書館を管理運営



■新宿区立図書館館長 大城澄子 (おおしろ すみこ) 氏、障がい者サービス担当 川口泰輝 (かわぐち やすてる) 氏



■デジ図書の試聴体験

■株式会社図書館流通センター

▽新宿区立戸山図書館 指定管理業務開始：平成21年4月

▽問合せ先：サポート事業部
TEL：03-3943-2221

▽新宿区立戸山図書館
TEL：03-3207-1191

▽ウェブサイト：
<http://www.trc.co.jp/>

新宿区立戸山図書館

（株）図書館流通センターは、全国の図書館の資料購入のサポートや、指定管理者制度（*1）の中で多くの図書館の運営を行っているが、今回は新宿区立戸山図書館の取り組みを紹介する。

図書館というと、本を借りる目的で利用している人が多いと思う



■障害者週間のパネル展示

が、地域の情報提供の場としての役割も大きい。

同館の特色は、障害者・高齢者サービスに力を入れていること。高齢者向けには、最近メディアでもしばしば取り上げられている「遺言書の書き方」などのイベントも開催。クラシックコンサートや落語会は、高齢者が多く住む団地が近くにあるため、評判は良いという。

サービスの一つである図書の音訳は、高い技術を必要とし、完成まで時間のかかる作業だ。活字で本を読むことが難しい人はもとより、手で本を持っていない人にも役に立つ。希望する本が図書館の蔵書になれば、全国の図書館から取り寄せたり、戸山図書館で制作したりして入手することが可能。作品はカセットテープのほか、デジ図書（*2）で利用できる。

取材した日は、ちょうど障害者週間（12月3～9日）のイベント開催中で、障害のある人の著書や、

視覚障害の人が開発に協力したダイアログ・イン・ザ・ダーク・タオルを紹介していた。

みんな一緒に

イベントには誰でも参加でき、もちろん盲導犬も同様だ。イベントに盲導犬が来て接する機会が多くなれば、盲導犬使用者を特別だと感じなくなるだろう。「障害のある人は特別な存在ではないことを理解してもらえれば」と大城氏。社会を少しずつ変える役割も、図書館は担っている。

かなまるじゅんこ
（金丸淳子）

- *1：住民の福祉増進を目的として利用される公共施設について、民間事業者が住民サービスの質の向上を図り、施設設置の目的を効果的に達成するために設けられた制度。
- *2：視覚障害者や活字の印刷物を読むことが困難な人のためのデジタル録音図書。デイジー（DAISY）とは、システム名「Digital Accessible Information System」の略称。

アクセシブルデザインの総合情報誌

インクル 第76号

2012（平成24）年1月25日発行
"Incl." vol.12 no.76

©The Accessible Design Foundation of Japan
（The Kyoyo-Hin Foundation）, 2012
隔月刊、奇数月に発行

一般頒価 1部1000円
（但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています）

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのCD-Rを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行（助共用品推進機構）
郵便番号 101-0064
東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F
電話：03-5280-0020
ファクス：03-5280-2373
Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org
ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子
事務局 星川 安之
森川 美和
金丸 淳子
水野由紀子
高橋 裕子
松岡 光一
小豆沢光代

執筆・協力 青松 利明・大熊由紀子
（五十音順）上野目玲子・後藤 芳一
下野由美子・菅谷百合子
林 佳文・美月めぐみ
山本百合子

印刷・製本 ベスト・イーグル(株)
サンパートナーズ(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、（助共用品推進機構までご連絡ください。上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。